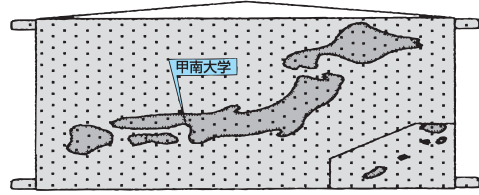


Zephyr

〈第50号〉

ゼフィール・にしかぜ


<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集＊外来語と異文化理解》

☆所長からのメッセージ 「外来語と外国語学習」	中村 典子	1
〔英語〕 日本語と英語の魅力：外来語の受容	中村 耕二	2
〔ドイツ語〕 外来語系カタカナの氾濫の功罪について Arbeit = アルバイト？	柳原 初樹	4
〔フランス語〕 フランス語における外来語の歴史	ディディエ・シッシュ	6
〔中国語〕 日本語と中国語に見る漢字表現と異文化理解	胡 金定	7
〔韓国語〕 前近代の東アジア漢字文化圏における交流と語彙		
－中国・韓国・日本を視野に入れて	金 泰虎	8
〔日本語〕 「外来語」トークで異文化理解	森川 結花	10

外来語と外国語学習について

国際言語文化センター所長 中村 典子

現在、私たちが日常的に使用している日本語では、夥しい数の外来語が使われています。外国語を学ぶにあたって、私たちは、日本語で使われている外来語とどのように付き合えばよいのか、考えてみたいと思います。

言語学者の田中克彦は「外来語要素の充満は、独自性の喪失のみならず、自らの言語の無能力、力不足を露呈したことにもなる。自力ではどうにもならないから、外の言語の力をかりたということになるからである」¹と述べています。確かに、自国語の独自性に強い誇りを持っているフランス人は、外来語を取り入れる必要がある場合も、外国語の単語をそのままの形で取り入れる「借用」(仏語 *emprunt*; 英語 *loanword*)ではなく、外国語の要素を自国語の既存の要素に直訳して取り入れる「翻訳借用」(仏語 *calque*; 英語 *calque*)を使うのが普通です。かつて、携帯用の小型音楽再生装置の「ウォークマン (walkman)」を、*baladeur* (「歩く人」という意味) とフランス語の単語で表現するようにアカデミー・フランセーズ (Académie française)²が強く推奨した結果、今では、*baladeur* という表現が定着しています。IT関係の用語についても、ソフトウェア (英語: *software*) は *logiciel*、ダウンロード (英語: *download*) は *téléchargement* とフランス語の単語が使われます。フランスには、1994年に成立した〈トゥーボン法〉 (*loi Toubon*) [正式名: フランス語の使用に関する法律]があり、公的な場でのフランス語の使用が義務づけられ、商品の使用説明書や広告、契約等で、他の言語による提示も認めるものの、フランス語は必ず使用しなければならないと決められているほか、フランス語にある言葉は、すべてフランス語を使うように要請されているのです。また、2011年5月末、フランスのメディアを規制する機関である視聴覚高等評議会 (CSA: Conseil Super de l'Audiovisuel) は、テレビやラジオが自社の交流サイトのページを視聴者に紹介する際に、「Facebook」や「Twitter」という言葉を使用することを禁止してしまいました。特定のブランドの宣伝をすることが1992年の法律に違反するため、という理由からです。不条理な法律だという批判はありますが、外来語の氾濫

や商業主義から自国語を守ろうとする意気込みはあっばれだと言えるでしょう。

ところで、日本語で使われる外来語について考えてみると、多くのものが「借用」や「翻訳借用」ではなく、むしろ「和製英語」ではないかという疑念が頭を擡げてきます。日本語を勉強しに来ている外国人留学生が一番困るのが「和製英語」です。「和製英語」とは認識しないまま、「オーダーメイド：英語 custom-made」「リベンジ：英語 return match」「ガードマン：英語 security guard」「バイキング：仏語、英語 buffet」といった表現を使う日本人が多いため、英語がわかる外国人は却って混乱してしまうのです。また、親しい間柄の会話で用いられる「アポ：英語 appointment」とか、「プレゼン：仏語 présentation、英語 presentation」といった日本語特有の省略の仕方も、外国人には不可解なようです。「以心伝心」に慣れた日本人は、仲間内の非公式の会話において、できるだけ言葉数を少なくする傾向があるのだと説明できますが、外国人にわかりやすい日本語でメッセージ（これも外来語ですが）を伝えるためにも、母語としての「美しい日本語」を守るためにも、「和製英語」には注意しなければならないでしょう。そもそも、意味がよくわからない「和製英語」がなぜこれほど氾濫しているのかを考えると、それは、テレビや新聞・雑誌をはじめとしたマスメディアの広告において、消費者の注意を引くような「カタカナの和製英語」が、故意に、しかも、頻繁に使われたことがひとつの大きな原因でしょう。そのほうが「何となく格好いい」と感じ、「横文字由来だと新しいものだと錯覚してしまう」西洋コンプレックスを持つ、流行好きの日本人の弱点をついた巧妙な商法です。日本人ほど、マスコミや広告に影響される国民もいないでしょう。テレビによる「一億総白痴化」という言葉が流行になったのは、1957年だということですが、今の日本人にそうした危機意識はあるのでしょうか？ 本当の情報が隠されがちな現代において、母語だけではなく、英語はもちろん、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語のニュースをインターネットで検索して読むことによつてこそ、日本のマスコミが隠している真実を知ることが可能になります。生涯にわたって活用できるような外国語の運用能力を身につけることがどれほど大切なことであるか、学生の皆さんは今一度、考えてみてください。

さて、少なくとも2つの外国語を学ぶ私たちは、日本語の中の外来語や和製外国語が、本当に原語の意味を伝えているのかどうか、十分に注意する必要があります。もちろん、全く新しい概念や事物を導入する際には、「借用」や「翻訳借用」も必要ですし、外来語が、もともとある日本語表現と併用されることで、より豊かな表現が可能な例もあります。英語で rice、フランス語で riz に当たる単語に関して、日本語では「稲、米、めし、ご飯、ライス」と少なくとも5つの表現があります。定食屋やラーメン屋で食べるのは「めし」か「ご飯」、レストラン（仏語の restaurant から来た外来語）の洋皿に盛られるのは「ライス」、と特に意識はしなくとも、私たちは明確に区別して使っているのです。このように、母語である日本語について再認識を深めることも、外国語学習の重要な目的のひとつなのです。学生時代の4年間、継続して2つの外国語を学習することをお勧めします。

註1 『ことばとは何か ― 言語学という冒険』 講談社学術文庫 p.83.

2 フランス語の保存と純化を目的とする国立学術団体で、1635年にリシュリューにより創設された。

日本語と英語の魅力：外来語の受容

国際言語文化センター教授 中村 耕二

日本は広義には漢字という外来語を創造的に取り入れ、独自の言語文化を発展させました。日本語は表意文字である漢字と音節文字である平仮名、カタカナの優れたハイブリッドです。日本語は漢字の表意性のおかげで、柳田国男が言うように読み飛ばすことができ、文章を読む速さは他の言語に勝

るとも劣らないと思います。さらに日本語には2000年の歴史を越えて現存する「有難う」「遊び」「聞」「道」「わび」などのやまと言葉があります。また、日本の言葉には昔から言霊が宿り、言葉の不思議な力や魂が信じられています。

一方、英国は征服の歴史の中で外来語に影響され、多様な言語文化を発展させました。英語母語話者の数はシェイクスピア(1564-1616)の時代わずか500万人ほどでした。英国はローマ帝国に征服され(AD 43-430)ラテン語が入り、その後バイキングに征服され(AD 600~)ゲルマン語が入り、最後にフランス人王 William Conqueror が英国を統一(AD 1066-1083)しました。その後はフランス語が大量に入り300年間もその影響を受けました。1215年にはフランス語が公用語として認められ、上流社会はフランス語を話していました。現在の英語の語彙数は50万語、80カ国で使用されています。5億1000万人が英語を母語とし、公用語や外国語としての英語の使用人数は世界第一位です。英語はもはや英米人の母語だけでなく、世界の人々のコミュニケーションの手段です。

まず、英語の日本文化における受容の例を見て見ましょう。Boys be ambitious. は有名なクラーク博士の言葉ですが、明治時代の人はこの野心を持ってという言葉に驚きました。当時の野心とは明智光秀の謀反を連想させるので、「少年よ大志を抱け。」に変わりました。

次に Yes と No の違いは厄介です。英語はどんな文脈でも否定は No、肯定は Yes ですが、日本語には「はい」と「いいえ」が文脈によって異なり、へりくだったり、励ましたり、慰める場合に限り、「いいえ」を使います。「外国語が堪能ですね。」と言われると、「いいえ、それほどでもありません。」と否定します。また、「私はやっぱり自信がありません。」と相手が言うとき、「いいえ、やってみなければわかりませんよ。」と励ますことがあります。一方、英語では Do you mind my smoking? に対して、気にしないなら、No と答えます。日本人は言語文化の違いでよく Yes と答えてしまいます。

日本で使われる英語も一部英米人には驚きをもってみられます。Terminal Hotel は最終的なホスピスのように聞こえます。Clean Staff と書かれた制服を英米人はとても清潔な職員と理解してしまうので、正しくは Cleaning Staff です。イギリス人の友人と近くの喫茶店に行くと、英語で Morning Service と書かれていたので、「この喫茶店では朝の礼拝をするのですか。」と聞かれました。ビールの Super Dry は極度に乾燥せよ! という意味であり、本来は英国発祥の服のブランド名です。

一つの言葉が持つ意味内容も言語によって異なります。英語の play と日本語の「遊び」は異なります。英語の play は個人として楽しむ肉体運動や刺激を得て、自分の身体を充実させることです。しかし、やまと言葉の「遊び」は広辞苑によると、「日常的生活から心身を開放し、別天地に、身をゆだねる」とあります。芭蕉にとって、遊びは、日常の自分を抜けだして、自然に身を置いて旅をしながら俳句を楽しむことのように思えます。土地や金を遊ばせる、江戸っ子の遊び心が歌舞伎を盛んにし、人は日本を離れて遊学します。栗田勇氏(2010)は「日本の文化や文学においては、ハンドルの「あそび」に象徴されるこうした基本理念が重要で、これこそ日本文化そのもの。」と言っています。

次に日本語と英語の文化的差異について見てみましょう。国語学の金田一春彦(2002)は「義理」「厄介」「人情」などの日本語は英語に訳しづらいと書いています。確かに、文化相対主義を標榜したルース・ベネディクトが、天皇制の存続にまで影響を与えた名著「菊と刀」を著し、「恥の文化」を西洋世界に説明するまでは、恥・忠・義などを基調とする文脈の高い社会(High Context Society)の言語文化は西洋人にとって、不可解でした。「以心伝心」や「一を聞いて十を知る」「秘すれば花」のような表現は日本文化を表象しています。

意見の対立に関しても、I cannot agree with you, but I will defend to the death the right to say it. (私はあなたの意見には同意できないが、その反対意見を言う権利だけは死守します。) という信念を持った個人主義の国から来た人に「話せばわかる」という言葉も理解しがたいです。「和を以て

「尊しとなす」の日本文化と反対意見により物事をより客観的に見る欧米文化との違いかもしれません。英国では子供でも納得がいかなければ、「I am not convinced.」と言い、幼い子供に「僕は説得されていないよ。」と言われました。

愛情表現に関しては、人前で優しく手を握り続けるイギリス人夫婦に対し、日本人は照れ臭さを感じます。しかし、朝一番に「Good morning a little flower.」とキスの挨拶でその日を始めるイギリス人にとって、愛情表現は自然なことです。逆に、明治の文豪が I love you. を「あなたとなら死んでもいいわ」、「あなたといると月が綺麗ですね」と訳したのもいきですね。

一方、外来語が母語の中で豊かな表現力を発揮する場合があります。「今、未来のとびらを開けるとき、悲しみや苦しみが、いつの日か、喜びに変わるだろう、I believe in future. 信じてる。」という歌詞があります。NHK 生きもの地球紀行のテーマソングで、卒業式では日本の子供達が歌いました。この Believe の歌詞を締め括る英語は優しさのある日本語の歌詞に抱かれ、輝いています。

反対のケースですが、コペンハーゲンの Danish 大学で開催された 2004 年の CESE (ヨーロッパ比較教育学会) の開会式で、ロンドン大学の Robert Cowen 会長が「What the world needs is the heart of Haiku.」と言われました。自然を愛し平和に導く「俳句の心」こそ、今の世界には必要だと力説され、多くの参加者の賛同を得ました。英国人にとって外来語である the heart of Haiku (俳句の心) という言葉が今も私の心の中で優しく木霊するのです。

結論になりますが、外来語の受容に際し、母語の意味を曲解せず、個々の言語文化への尊敬の念と学びが大切です。グローバル化の嵐の中で、毎日のように世界の少数民族の言語文化が消失しつつあります。今こそ、私達のすばらしい言語文化を次世代に継承しながら、日本語の美しさやその感性を外国に伝えることが必要です。侵略や国家の言語政策でなく、市井の人々による外来語の受容と発展こそ、異文化交流の証ではないでしょうか。

参考文献 栗田勇 (2010) 「日本文化のキーワード：七つのやまと言葉」

外来語系カタカナの氾濫の功罪について Arbeit = アルバイト？

国際言語文化センター准教授 柳原初樹

ドイツ語を教えていて気になっていることのひとつ。「アルバイト」という単語がいつから「小遣い稼ぎの副業」の意味で使用され始めたのでしょうか。語源はドイツ語の Arbeit ですが、ドイツ語の Arbeit は本業としての「仕事」、「業績」、学生が使用する際には、学生の本業である「勉強」の意味です。ドイツ人の学生が、「Ich muss heute viel arbeiten!」と言う時には、「今日はたくさん勉強しなくちゃ！」の意味で、バイトどころではありません。日本語化した「アルバイト」に対応するドイツ語の単語は、Nebenarbeit, Job であり、動詞としては jobben が用いられます。この倒錯というか、原語からの意味の乖離について年配のドイツ文学専門の某大先生にお伺いしたところ、戦前の学生が、大学の授業後に、家庭教師などに出かける際に、高踏的ジョークか、教授へのアリバイとして、「Arbeit = 勉強」に行ってきますといったのが始まりだそうです。一種の隠語或いは、アリバイだったのですね。ところで、アリバイって言葉の語源をみなさんにご存知ですか。刑事ドラマやサスペンスで必ず使われるこの言葉。これはラテン語の alius (別の) ibi (そこに) → alibi が語源なのです。そのことを私が知ったのは、大学院の時に、ドイツ留学中に始めたラテン語の勉強を継続するために、帰国後に法学部の大学院で「ローマ法」の授業に参加していたときです。

さて、ここからが本論です。我々が普段耳にしたり、見たり、読んだりしている日本語の文章の中

にどれほど多くの外来語系のカタカナ文字があるでしょうか。また、その本来の意味を我々はどれほど知っているでしょうか。幾つか例を挙げて見ましょう。物としては、テレビ、ビデオ、電子レンジ、バイク、用語や概念として、コンプライアンス、マーケット、アカウントビリティ、イベント、シンポジウム、食べ物や職業では、トルテ、ジェラート、ドルチェ、シェフ、ショコラティエ、パティシエ。スポーツ用語では、ゲレンデ、シュプール、ボーゲン、ピッケル、アイゼン、ピッチ、セリエA、ブンデスリーガ、イナバウアー。枚挙にいとまがありません。しかし、考えてみてください。カタカナはとても便利ですが、何でもかんでも飲み込んでしまうブラックホールのような点でぞっとしませんか。外来語の本来の意味も含蓄も吸い込まれ、ひどい場合には跡形もなくなってしまうか意味が変換してしまうのが、上記の Arbeit の例です。

例えば、テレビの語源は tele（遠い）+ visio（像、見る）です。ドイツ語では、Fern（遠く）+Seher（見るもの）→Fernseher と表現されています。ちなみに、隣国中国語では、「電視機」と意訳されています。中国では、きちんと意味を踏まえて翻訳されていますね。カタカナですべてを表記するのは、便利ではありますが、安易に流れ、創造的な言語活動を弱める面もあります。コンプライアンスは通常、「法令順守」という意味で使用されますが、なぜカタカナで表現されねばならないのでしょうか。オックスフォード英独辞典で compliance を引くと、Zustimmung（同意）、Unterwürfigkeit（服従）とドイツ語の日常単語が出てきます。

最後に、外来語をどう翻訳するか、表現するかは、異文化理解の上で極めて重要なことです。戦後日本の「知の巨匠」とも呼べる加藤周一は、明治初頭の先人たちの西洋文明摂取の為の凄まじい翻訳活動を振り返りながら、「原語と訳語との重大なずれは、connotation（含意）の水準でおこり。一文化が翻訳の上に築かれたということは、異文化の概念の含意をずらせてつくったもう一つの概念の上に築かれたということである」と鋭く分析しています。加藤はその例として、英語の liberty の訳語としての「自由」や right/s の訳語「権利」を詳細に検討しています。加藤によれば、福沢諭吉は訳語「自由」は「わがまま勝手」という連想を用意に断ち切れないことを意識していたそうですが、これは「自由」という語が新しく造語されたのではなく、古典から採択され、その古典における含意を背負っているからに他ありません。その後の自由民権運動の高まりを経ながらも、1930年代の超国家主義の時代、「自由」は極端に卑しめられました。「そのことは、まさに日本社会における『自由』の価値が、訳語の定着にも拘らず、安定した位置をもたない現実を、鮮やかに反映しているだろう」と加藤は述べています。加藤はまた、「翻訳は外国の概念や思想の単なる受容ではなく、幸いにして、または不幸にして、常に外来文化の自国の伝統による変容」であると、明治以降の翻訳文化を振り返っています。それは、同時に、1945年の敗戦以降の「西洋語（主として米語）のカタカナ音写方式」とも異なっていました。

今年急逝したアップル社の創業者 Steven Jobs の伝記が、10月末に世界で同時に発売されました。彼が、禅から深い影響を受けていたこと、禅の無駄を排除した簡素な表現形式に非常に大きな影響を受けていたことが、広く知られるようになりました。日本の禅は、Jobs にとっては Zen だったでしょう。ひょっとすると、世界で Zen が新たな進化を遂げ、将来「ゼン」になって日本に逆輸入されるかも知れません。その時、我々は、「ゼン」と「禅」の違いをどのように説明するのでしょうか。日本文化の発信の能力も問われるでしょう。その意味で、丸山真男・加藤周一著『翻訳と日本の近代』（岩波新書）を一度読んで考えてみてください。

フランス語における外来語の歴史

国際言語文化センター教授 ディディエ シッシュ

現代のフランス語には、外来語が多くなりました。現在、語彙の13パーセントが外来語だと考えられています。その中では、もちろん英単語が一番多いのですが、時には、使用の必要性が疑わしい場合もあります。これは、現代のフランス語と日本語の共通点だと思われれます。カッコ良く見られたいから英単語を使うという傾向があると言えるでしょう。一方で、英単語に見えても、日本人しか使わない和製英語の例は少なくありません。例えば、日本語で「スタンドプレイ」という表現がありますが、アメリカ人やイギリス人にとって、この表現は意味をなしません。（英語では grandstanding と表現します。）フランス語でも、同じような傾向が見られます。例えば、tennisman という単語です。英語の tennis player のことです。フランス製英語のことをフラングレ《franglais》と呼びます。これはフランス語で、français (French) – anglais (English) という造語です。

さて、フランス語史を振り返ってみると、数世紀にわたって外来語が入って来たことがわかります。外来語の導入には、世界の勢力図の変遷が反映されています。例えば16世紀には、ルネッサンスの先駆けであったイタリアがヨーロッパの注目を浴びていたため、フランスでイタリア語の単語を使うのが流行しました。服飾・建築・料理といった分野でいろいろな単語が導入されました。Pantalon (ズボン)・costume (服装)・balcon (バルコニー)・banquet (宴会)・citrouille (カボチャ)・macaron (マカロン)などの単語はこの時代にさかのぼります。レオナルド・ダ・ヴィンチをフランスに招き庇護したフランソワ1世が、大富豪の商人だったメディチ家から息子の妃として迎えたのがカトリーヌです。彼女はフランスに洗練された食卓の芸術や香水などをもたらし、イタリア語語源の言葉がフランス語に浸透していきました。フランス語の parfum (香水) はイタリア語の profumo という言葉に由来していますが、当時はイタリアが最先端の調合技術を持っていたのです。

17世紀はスペイン帝国の黄金期になり、当時のスペイン文化への関心が高まりました。フランス人作家のCorneille (コルネイユ)は、1636年に「ル・シッド」という芝居を初演し大成功を収めました。スペイン演劇の影響を大きく受けています。この時代にはスペイン語の単語がフランス語に入ってきました。その例として、camarade (仲間)・mantille (大判の黒スカーフ)などという言葉があります。また、スペイン帝国支配下のアメリカ大陸から新しい嗜好品がもたらされ、フランス語に定着していきました。まず頭に浮かぶのは、chocolat (チョコレート)・cacahuète (ピーナッツ)などです。忘れてはならないのが、フランス文化にすっかり浸透している café (コーヒー) という言葉です。これは、17世紀後半にオスマン帝国起源の言葉がイタリア語経由でフランスにもたらされたのが始まりです。

18世紀から19世紀の半ばになると、イギリスが世界の大国になりました。政治的な争いにもかかわらず、フランス人はその文化や文学を受容していきます。シェークスピアの演劇が初めてフランス語に訳されたのはこの時代です。また、幾何学的な様式を持つフランス式庭園に代わり、自然を自由に取り入れたイギリス式庭園が盛んになりました。イギリスへの関心が高まり、知識人は英語から新しい単語と概念を取り入れるようになりました。その最たる例は、romantique (ロマン派の)・sentimental (センチメタルな)などでしょう。または、大詩人 Baudelaire (ボドレール) が好んで使ったのが、dandy (ダンディー) や spleen (憂うつ) という単語です。新しい感情性をもたらされたと言えるでしょう。

因みに、まずフランス語が英語の語彙に入り、それが、再びフランス語に戻った単語もあります。

例えば、bougette（財布）というフランス語が英語に導入され、budget（予算）になり、この新しい綴りと意味でフランス語に再導入されました。また、humeur（気質）という言葉が英語のhumour（ユーモア）になり、この綴りと意味で別の単語としてフランス語になりました。このように、言葉が二つの言語の間を往復した例は少なくありません。

更に19世紀の後半には、ドイツがヨーロッパ第一の大国になり、ドイツ語の影響を受けるようになります。例えば、chenapan（ろくでなし）・trinquer（乾杯する）・bock（生ビールの最少単位）などです。Trinquerはドイツ語のtrinken（飲む）という言葉に由来しています。

20世紀には、大国になったアメリカの影響で、再び英語の影響を受けていきます。政治や経済または金融の分野では、英語由来の単語が非常に多いです。ブッシュ政権を指すために、フランス人のジャーナリストはl'administration Bushという表現を使用しました。これはBush administrationをフランス語風に変えたものですが、フランス語として間違った使い方だと言えます。なぜなら、フランス語のadministrationという単語の意味は、「政権」ではなく、「行政」だからです。

言葉の流れは、各国間の交流と世界の勢力関係の変遷の歴史を反映していることをみてきました。ここで、フランス語の特徴にも触れたいと思います。自国の言語と文化に誇りを持っているフランス人は少なくありませんので、ある分野で外来語が多くなり過ぎると、それらの単語の代わりにフランス語の新しい単語を作ろうとする動きが見られます。コンピューターやITCの分野が代表的だと言えますが、30年前に、英語のsoftwareとhardwareの代わりにlogicielとmatérielという新語が作られ、現代も一般的に使用されています。また、mail（メール）という英単語のスペルを変更して、mélという単語が誕生しました。ただし、カナダフランス語圏のケベック州から入って来たcourriel(courrier électroniqueの短縮形)という単語も広く使われています。

独自の言語にこだわるフランス人は、今後も、グローバル化の流れの中でも自分の文化的アイデンティティーを維持していくと言えるでしょう。

日本語と中国語に見る漢字表現と異文化理解

国際言語文化センター教授 胡 金 定

日本と中国の交流はすでに二千年以上の歴史があります。この永きにわたる交流により、言語や習慣は相互に影響し合ってきました。「漢字」も交流の生み出した異文化の象徴です。唐の時代には遣唐使が、隋の時代には遣隋使が派遣され、本格的に中国の漢字を日本語の中に取り入れ始めます。十九世紀の終わりには清国から日本に留学生がやってきて、嘉納治五郎が設立した教育機関で学びました。魯迅もその一人です。そして日本の漢字表現を中国に逆輸入しています。交流によってもたらされた「漢字」という異文化は、時代の変遷とともに様々な形で理解されていきます。

四百年続いた漢の時代は、漢字を基本的に一語一文字で表していました。例えば、後に「学習」となった「学」や「習」などです。この二漢字語は日本語にも取り入れられ、それぞれ「学ぶ」「習う」、さらにサ変動詞「学習する」として定着します。漢字表現も一漢字が基本でしたが、時代の変遷によって二漢字の漢字表現も生まれます。

昔からある一漢字のものは、中国語と日本語で同じ意味を持つものが多いです。例えば「愛」や「人」など。これが二漢字の「愛人」になると、日本語では配偶者以外の異性を指しますが、中国語では配偶者を指します。両国で意味が全く異なります。もともと中国語と同じ意味で使っていた漢字が、外国の文章を日本語に翻訳した際に新しい意味が付け加えられ、違う意味で使うようになったものもあ

ります。例えば、中国語の「手紙 (shouzhi)」はティッシュペーパー、トイレットペーパーの意味ですが、日本語は英語の「letter」の訳に「手紙」を使い始めます。「勉強」ももともとは、中国語「勉強 (mianqiang)」の強制するという意味でした。

日本で出来た和製漢語、いわゆる「当て字」は中国人に通じません。たとえば、「珍紛漢・珍糞漢・陳奮翰」。言葉や話がまったく通じず、何が何だかさっぱり分からない、の意の「ちんぶんかん (ぶん)」です。儒学者の用いた漢語を冷かした言葉で、外国人の発音をなぞって生まれたとされています。「滅茶苦茶・目茶苦茶」(めちゃくちゃ) など、中国人は「苦いお茶？」などと連想するかもしれません。「当て字」は漢字本来の意味と関係なく、その音訓を借りて当てた漢字で、「借字」と言います。当て字の発想は日本人特有のものです。一部の和製漢字は中国の辞書にも収められています。例えば、「峠 (とうげ)」は中国語で「ka」、「畑 (はたけ)」は「tian」と発音し、日本の地名や人名など日本のことを表現するときに使います。

現代中国語の語順は古典中国語の語順と違っています。「主語⇒述語⇒目的語」で、「买卖 (mǎi mai)」の語順の言葉を継承しました。一方、現代日本語は「主語⇒目的語⇒述語」の語順により、売買 (ばいばい) の言葉を使うようになりました。

現代の中国人は古典中国語を読んで「珍紛漢紛」になる人が多いです。原因は古典中国語と現代中国語の表記や文法などの変化にあります。漢字造語法の変化は著しく、古典語には「売買・买卖」「紹介・介绍」「言語・语言」「平和・和平」など同じ意味で使われていましたが、現代中国語と現代日本語で使われていますが、語順で違ったのです。

外国語学習は異文化理解から始まります。日本と中国は漢字を以て表記するので、漢字を使わない言語を学習する時と比べて、また違った難しさがあります。さらに、習慣の違いも大きく、言語だけにとらわれていては真の学習にはなりません。中国で開発され世界に普及した食べ物の代表である、ラーメンを例に挙げてみましょう。固さや太さなど麺そのものを大事にする中国では、よく店先で麺職人の実演が披露されています。比して日本はスープに対するこだわりが強く、麺職人の姿を見かける機会は少ないように思います。食べ方にも違いがあります。中国人はいくら熱くても、音を立てて麺をすすすることはありません。行儀が悪いと言われます。一方日本人は「ズルズル」と音を立てながら食べるものとされています。「ズルズル」すすることによって麺を冷ましながら美味しく食べようという合理的な方法です。中国人は麺というハードと礼儀を重んじ、日本人はスープというソフトと実用を重んじている例と言えるでしょう。

外国語習得には、コミュニケーション能力(会話力)だけでなく、異文化理解能力をつけていくことが必要です。外国語学習を通して異文化を体験すると、世界にはさまざまな文化があり日本という自文化はその中の一文化にすぎないことに気がつきます。いろいろな価値観や思想、生活習慣、風習に接し、お互いに尊重しあうことの重要性に目覚めていくことによって、外国語学習への意欲、楽しみがさらに増していくに違いありません。

前近代の東アジア漢字文化圏における交流と語彙

—中国・韓国・日本を視野に入れて—

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

今のグローバル (Global) 化時代は、人々が簡単に国境を越えて外国の人と交流することから、それに伴って互いの国の語彙もたらされています。こういった現象は今の時代に限ったことではなく、前近代の時代から絶えず行われてきました。その程度の差はあったものの、前近代の東アジア (Asia)

における中国・韓国・日本の間では、交流とともに漢字の語彙が伝わりました。ここでの交流とは、広義の意味で、平和な交わり、恣意的な戦争、強制的な支配や被支配による接触も含まれます。一方、語彙とは「書き言葉」や「話し言葉」を含む単語という意味で使っていますが、その区分が必ずしも明確ではないことを、予めお断りしておきます。

東アジア漢字文化圏における交流を大まかな経路でその方向性を示しますと、前近代においては古代文明の発祥地である中国から朝鮮半島を経由して日本列島に先進文明の語彙がもたらされました。そして近代国民国家の成立期以降は、逆に近代化に成功した日本から近代文明の語彙が大陸のほうへ伝わっていったのです。しかし、今のグローバル化時代は各国が諸外国から直接文物や語彙を取り入れるようになり、従来大陸から海洋へ、逆に海洋から大陸への構図よりも、諸外国と直接つながる構図へと変化しています。

ところで、この夏、中国の東方航空の航空機に乗る機会があったのですが、そのとき、前近代の東アジア漢字文化圏における交流の名残と考えられる語彙に出くわしました。まず、機内のトイレ(Toliet)に「厕所」と漢字で書かれていたのですが、「厠」という字は、日本では「カワヤ」と読みます。これは昔のトイレが川に掛けられていたことに由来する言葉とされています。そして実に、韓国でも近代国民国家成立期以降、しばらくは「厠間」という語彙が使われていました。日本では今でも希に、京都などで古い住宅を改良して食堂にしている店では、トイレに古い住宅の風情に相応しい「男厠」・「女厠」という標識を付けていたりします。

しかし、前近代に「厠」という語彙を作り上げた本家本元とも言える中国でも、今は「厕所」という語彙を使う頻度が減りつつあり、一般的には「手洗間」・「衛生間」と言われています。韓国でも同じ傾向にあり、今は「化粧室」・「便所」・「WC (Water Closet)」を使っています。グローバル化時代以前は、「뒷간 (ディッカシ)」という語彙も使い、稀に寺では「解憂所」、つまり「憂いを解消する場所」というレトリック (Rhetoric) な表現をしていることも見かけられます。最近、日本では主に「化粧室」・「トイレ」・「お手洗い」という語彙を使いますが、グローバル化以前は「便所」も使いました。この「厠」という語彙が廃れていった背景には、近代国民国家成立期やグローバル化時代の交流による西洋の影響が大いにあると考えられます。

さらに面白いのは、機内トイレのドア (Door) に書いてあった「推」という文字です。この「推」は日本語では「オス」と読み、英語の「Push」の意味です。そこで「推」が使われている語彙の中で「推敲」を取り上げてみたいと思います。

この「推敲」という語彙の本来の意味は、「オス (Push) ・たたく」ですが、他の意味をもつ故事として生まれ、日本・韓国・中国で今も使われています。その故事の意味合いというのは、唐の詩人賈島 (779-843) の詩〈題李凝幽居〉に由来しています。詩の内容は、次の通りですが、「推敲」の由来に加えて、詩人の人生の生き様、つまり仏門に出家して再び俗界に戻ったということも垣間見えます。

〈題李凝幽居〉 (李凝の幽居に題す)

閑居少隣竝 (閑居鄰竝少なく)
草徑入荒園 (草徑荒園に入る)
鳥宿池中樹 (鳥は宿る池中の樹)
僧敲月下門 (僧は敲く月下の門)
過橋分野色 (橋を過ぎて野色を分かち)
移石動雲根 (石を移して雲根を動かす)
暫去還來此 (暫く去って還た此に来たる)
幽期不負言 (幽期言に負かず)

賈島は、詩作の際、下線を引いている「僧敲月下門」という詩句をめぐって、「僧推月下門」にすべきかどうか悩んでいたそうです。つまり、「僧侶は月光のもと門をたたく」にするか、それとも「僧侶は月光のもと門をオス (Push)」とするか迷ったのです。結局は、前者に落ち着きましたが、このことから「オス (Push)」と「たたく」の「推敲」が「字句を様々に考え練る」、または「添削したり訂正する」という故事に発展したのです。

ところで、今の日本では「オス (Push)」の意味を表す場合、「押す」を使っています。例えば、多くの建物のドアやトイレのドアの至る所に、「Push」の意味で「押す」と書いています。本来、「推す」という語彙は、物理的力が横に、つまり前から後ろの水平方向に伝わる「Push」の意味であり、一方「押す」は力を上から下へ垂直に伝える「押さえる」の意味なのです。したがって、このことを鑑みると、日本で使われている「Push」という意味の「押す」は、上記の賈島の詩句でみてきたように「推す」と書き直すのがより正確です。

これに対して、今の韓国では漢字はほとんど使わず、前から後ろに力を加える様々なドアに英語の「Push」、または同じ意味の韓国語の「미세요 [ミセヨ]」(Push) という語彙を書いています。

この上記の内容から、前近代の東アジアにおける交流から使われた「厠」や「推」を通して、故事として新たな意味の語彙が生まれたこと、時代の流れや新たな交流とともに語彙が廃れて行くこと、そして語彙本来の意味とずれて使われるケース (Case) も確認できたと思います。

「外来語」トークで異文化理解

国際言語文化センター日本語特任講師 森川結花

日本語学習者とおしゃべりの中で盛り上げられる話題といえば「カタカナ語」です。

この夏、京都の我が家へ遊びに来てくれた元留学生のデイナさん（アメリカ出身）が小学4年生のうちの娘と話していた時のこと。小学校の夏休みの宿題には何があるかという話題になって、「夏いきいきドリルと、自由研究と、こどもエコライフチャレンジと……」と言っていたところから「外来語」トークが始まりました。

「え？こども……何ですか？？？」

こどもエコライフチャレンジとは、京都市の小学校で取り組んでいる環境保護促進のための学習活動のことですが、英語話者のデイナさんには一瞬「？」でした。そこで、娘がデイナさんに見てもらおうと張り切って持ってきた「こどもエコライフチャレンジ」のワークブック。そこにはカタカナ語が溢れていました。マイバッグ、リサイクル、レジ袋、紙パック、リユース……、そして「エコ」。エコクッキング、エコキッズ、エコな遊び、エコしよう！きわめつけはイメージキャラクターのエコちゃん（11ページのイラスト）。

国際関係学が専門のデイナさんは「京都議定書」についてもよく知っていたのですが、これらの「エコ」の用法には戸惑いを感じていたようでした。

「英語の ecology はちょっと違います……」

優しいデイナさんは「ちょっと」と言ってくれましたが、実は英語の ecology は日本語で言えば生態学。「環境を保護するためにみんなで頑張ろう！」という意味は全くありません。

「日本語のカタカナ語は時々分かりません。英語と違いますから困ります。よく考えたら分かるものもありますけれど、全然分からないものもあります」

とデイナさん。確かに、日本語には外国語の語彙をずるずると取り込んで、原語の語形や品詞、意

味まで変成し、日本語とも外国語ともつかない不思議な新語を作って定着させてしまうという器用な外来語受容の伝統があります。中国、韓国、ポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、そして英語。これら諸外国語の語彙を外来語として受け入れやすかったのは表音文字カタカナのおかげですが、そのカタカナも（そしてひらがなも）、元はと言えば中国の漢字からできた文字です。こう考えると、日本語の中で純粹に made in Japan と言えるものって一体何？という疑問すら生まれてきそうです。

ところで、日本語の中の外来語は数え切れないほどありますが、それとは逆に、日本語がどこかの国の「外来語」になった例を皆さんはご存じですか。昔から有名なのは、サムライ、ハラキリ、ゲイシャ、キモノ、ニンジャ……で、時代劇限定版のようですね。時代劇ファンのジョージ・ルーカス監督が「時代」になぞらえて『スターウォーズ』の「ジェダイ Jedi」という言葉を作ったという噂もありますが、真偽のほどは定かではありません。

それから、英語には和食系の Sushi（寿司）、Tofu（豆腐）や、武術系の Jujitsu（柔術）、Karate（空手）、Dojo（道場）、文化系の Bonsai（盆栽）、Haiku（俳句）、Zen（禅）などが日本語由来の外来語としてありますが、元留学生たちからの情報によると、最近では Typhoon（台風）に Tsunami（津波）がよく話題に上ったとか（ただし、米国人は「つ」の発音ができず、スナミと発音しているそうです）。Tsunami を英語圏に紹介したのは小泉八雲だったというのも有名な話ですね。時代を反映して第二次世界大戦中は Kamikaze（神風）や Zero（ゼロ型戦闘機）、Banzai（万歳）の文字が新聞のヘッドラインを飾り、時代が下って、Karoshi（過労死）、Hikikomori（引きこもり）、Otaku（オタク）が話題になり、いつの間にか世界中に Karaoke（カラオケ）、Anime（アニメ）、Manga（漫画）が広がり、Kawaii（可愛い）キティちゃんのグッズをどこの国の大人が持っていても珍しいと感じなくなりました。言葉と文化。これは二つに見えて実は一つのものなのですね。

ただ、ここにも言語上の問題は生じています。一つは発音の問題です。アルファベット表記には日本語にあったはずの「長音」が反映されていませんよね。長音の正しい発音は日本語学習者にとっての大きな課題ですが、直そうと思ってもなかなか直らない（いや、気づくことすらない）のは既に自国語での長音抜き発音に慣れきってしまったことの原因かもしれません。日本語の中の外来語も「正しい発音の習慣を妨げる」と言って外国語の先生方から不評ですが、同じことが言えるわけですね。

「ドイツ語だと外来語はジェンダーが問題になるんです」

と教えてくれたのはドイツ人のマーティンさん。そうそう、ヨーロッパ諸言語にはその問題もありましたっけ。

日本語の外来語（カタカナ表記語）に関しては、「意味が分かりにくい」ことが一部大人達の不興を買っていますが（国立国語研究所「カタカナ語言い換え提案」）、それは日本語の語彙が外来語として外国語に受け入れられた場合にもきっと同様の反応があるはずだし、誤解や偏見がくっついて意味不明のまま嫌われていることだってあるかもしれません。そこで外来語にまつわる誤謬や誤解を修正する草の根活動が「外来語トーク」です。皆さんも外国人の友達と外来語について話してみてください。言葉について語り合うことは相手を知り、己を見せること。抽象的な話題なので他人を傷つけたりする心配もなく、存分に語り合えます。前述のダイナさんもいろいろおしゃべりをしているうちにその表情から戸惑いが消え、エコちゃんの帽子の”DO YOU KYOTO?” というトンデモ英語を見ても、

「何ですか、これ？ははは。Yes, I do!」

と明るく答えてくれましたよ。気づき、許し、寛容、受容……異文化と自国の文化についていろいろなことを考えさせてくれるのも「外来語」の一つの役割なのかもしれません。



外国語科目・日本語科目優秀制度のお知らせ

国際言語文化センターでは、「外国語科目」「日本語科目」に優秀な成績を修めた学生（留学生）に対して、『優秀賞』を授与しています。

優秀賞を目指して「外国語科目」の学習をがんばって下さい。外国語科目の基準等については以下のとおりです。（「日本語科目」については、別に定めています。）

選考対象者	本大学に3年間以上在学し、3年次終了までに次の単位をすべて修得している者。 中級英語 2科目（8単位）以上 上級英語 1科目（4単位）以上 中級の第2又は第3外国語 2科目（8単位）以上 上級の第2又は第3外国語 1科目（4単位）以上 海外語学講座Ⅰは英語の中級科目として、海外語学講座Ⅱは第2又は第3外国語の中級科目として取り扱う。
選考対象科目	3年次終了までに修得したすべての外国語科目（基礎外国語科目を除く。）を対象とする。
選考基準	秀を7点、優を5点、良を3点、可を1点とし（ただし、2006年度以前の入学生が、選考対象者に含まれる場合は、秀を5点とする。）、3年次終了までに修得したすべての外国語科目（基礎外国語科目を除く。）の合計点により、上位30名を表彰する。なお、どの言語を第2外国語として履修したかは考慮しない。
優秀賞制度 選考者の発表	選考された者に対する表彰は6月に行なう予定である。

学習指導室を利用しませんか

国際言語文化センターでは、学生の皆さんの「外国語」学習の手助けをするために、「外国語学習相談アワー」を開設しているほか、6号館5階【英語学習指導室 651】、【ドイツ語・フランス語学習指導室 652】、【中国語・韓国語学習指導室 653】を外国語学習のために利用することができます。海外語学講座や長期留学、その他言語学習のためのグループワークや情報交換などに、落ち着いて学習できるスペースを利用してください。（利用できない時間帯がありますので、利用するときは国際言語文化センター事務室へお問い合わせください。）

外国語学習 相談アワー	・開設曜日：英語（火・木）、ドイツ語（金）、フランス語（水）、中国語（月）、韓国語（水） ・開設時間：12：20～12：50（昼休み） ・相談担当者：国際言語文化センター専任教員
学習指導室 自由利用	・開室時間：月曜日～金曜日 午前9時～午後5時 ・設備内容：書籍、雑誌、など。（ただし、担当専任教員に相談の上利用できます。） ・利用方法：6号館3階国際言語文化センター事務室へ利用申込みをしてください。（要学生証）
開設場所	・6号館5階 各言語学習指導室
開設の期間	・後期は2011年9月19日（月）～2011年12月23日（金）、 2012年1月4日（火）～2012年1月16日（月）

みんな集まれ！外国語で話してみよう

チューターと自由な会話を楽しんでみませんか！きっとコミュニケーション能力がアップしますよ。

国際言語文化センターでは、各言語（英・独・仏・中国・韓国語）を母語とするチューター（留学生ならびに非常勤講師の先生方）にお願いして、6号館5階にある学習指導室で自由に学生の皆さんと会話のできる時間を設けています。大いに活用してください。チューターの時間割は、各学習指導室前に掲示しております。